百々裏話(35)

おもて　あきら

〔謡曲作者付の色々 その五〕

前回に紹介した**謡曲作者備考**は、荒唐無稽に過ぎる資料であった。こんどは少しばかり増しなものを紹介しておきたい。

(4)金春作者付

生駒宝山寺所蔵の金春家旧伝文書の中に、江戸中期以後の筆写と認められる、懐紙一枚の作者付がある。三代の金春大夫に限定されたものであり、いずれ金春座の誰かの手に成ったと推測される資料であるから、金春作者付と仮称しておきたい。全文は左の通り。

(A)金春禅竹公作

賀茂芭蕉　とら送
小塩西行桜　鍾馗
雨月定家　小督
葵上　千寿重衡　楊貴妃（曲舞初り）
源太夫立田　白髪

(B)金春宗印作

行家　源氏供養　朝比奈
文学　おだまき　谷行
熊坂堂ゝ　ゆふれ熊坂
空蟬　足立原　ひつじ
しきみ天ぐ　高野物狂　かるかや
放下僧　くまの参　大仏供養
太刀堀　大盤若　鳥追舟
すみぞめ桜　雪頼朝　大会
竹生嶋　隠岐院　賀茂物狂
矢鴾　愛寿　こし状
座主ながし　たう渕明
祇王　小袖曽我　是盛

(C)金春禅鳳作

東方朔　いそだ　初雪
一角仙人　嵐山

(D)同禅竹作

六浦　あだち静　しのぶ
小川　石こつみ　安宅
たかつき　かんやう宮　長兵衛
せつたい　つね盛　剣持
西行物狂　唐船　邯鄲
橋弁慶　愛染川　殺生石
身うり　たけぶん　千行
猩々　舞車　鷺　ばゆう
しきみの原　松山鏡　大府
水瀬　いろこがた　国栖　金山寺
やかもち　飛雲　籠祇王　うらやみ
あふむ小町　九そへ　望月　ぬへ
道成寺　ぬれ衣　ゑんま

能・お茶の御写真

観世写真部

前島良彦
前島久男

港区芝白金里町七七
電話白金(441)一八四七五番
一五〇〇九番

化学工業の総合メーカー

電気化学工業

プラスチック・化学薬品
電炉品・肥料・セメント

右者作者付如此　九十八番

誤写やあて字が少なくないので、若干の推測や補足を加えておきたい。Aの白髪は白髭の誤写。Bの文学は文覚。「堂ゝ」は「たゞ」で、下の「ゆふれ熊坂」(幽霊熊坂＝熊坂)に対して、上の熊坂が「たゞの熊坂」(現在熊坂＝烏帽子折)であることを示した注記が、独立した曲名の如くに誤写されたものと思う。だとすると、金春作者付に収められている曲は、98番ではなく、97番ということになる。足立原は安達原。矢剣は八剣。「こし状」は吾子骨(こしよ)の誤写であろう。是盛は維盛。Cの「いそだ」は生田(いくた敦盛)の誤写。Dの小川は粉川(寺)のあて字。「たかつき」は高綱の、剣持は網持の、西行物狂は西行西住の、千行は千引の、それぞれ誤写と推測される。大府は内府(だいふ)、水瀬は水無瀬のあて字であろう。いろこがた(鱗形)・ゑんま(絵馬)はともに古い読み方、「うらやみ」は浦上の誤写らしく、「九そへ」も九品(くほん)または九穴の誤写と思われる。

さて、この金春作者付は、他の作者付にほとんど名の見えない金春宗印(宗筠)を34曲もの作者に擬している点や、金春禅竹作としてAとDの項に分けて多数の曲を収めていることが特色であるが、一体どんな性質の作者付で、どの程度信じ得るものであろうか。

残念ながら、金春作者付もまた、作者付としては独自の資料的価値を持たぬもので、能本作者注文(以下、注文と略称する)に基づいて後人が改竄した作者付と認められる。

まずAの金春禅竹公作の分であるが、ここに列挙されている15曲は、注文の金春禅竹作の分18曲から玉葛・西王母・六浦の三曲を除いて、順序もそのままに移したものに過ぎない。Cの金春禅鳳作の分も同様で、五曲の曲名・曲順ともに注文の禅鳳作と一致している。

Bの金春宗印作の分は、注記の混入と推測した「堂ゝ」を除く34曲のうち、冒頭の行家と中ほどの「かるかや」以外は、すべて注文に見える曲で、注文に河上神主作とされている四曲(源氏供養(正しくは紺上)・朝比奈・文覚・おだまき)と、近江能とされている四曲(安達原・半・放下僧・熊野参)と、作者不分明能とされている24曲とから成っている。それらを寄せ集めて勝手に宗印作としてしまつたものに過ぎまい。Dの同禅竹作の分も注文に基づく点が多い。43曲のうち、27曲目の松山鏡まではすべて注文に見える曲で、六浦が禅竹、舞車が宮増作とされているほかは、みな注文の作者不分明能の項にあり、安達静か

能面各種<プラスチック>……3,000円～7,000円
松野秀世肉筆能色紙……2,800円
スライド
松風<野口兼資>・羽衣<梅若六郎>……400円～800円
能楽映画<16ミリ>……34,000円

能楽図書・うたひ用品各種

能樂書林
神田神保町3－6
電話(261)0813・0848



一部　五〇円　送料六円
一年六五〇円　送料共

●右のように、十月号から定価を改めさせて頂きます

ら邯鄲までの14曲は曲順まで一致している。大府(内府)以下の16曲は注文に出ていない曲ばかりであり(「ぬへ」は誤写か現在鵺のことと考えておきたい)、この分だけは注文以外の資料に基づいて加えたものと認められる。

以上の如く、金春作者付は、注文を主たる資料とし、注文の金春善竹作によってAを立て、注文の善芳作を移してCとし、注文の河上神主作と近江能と作者不分明能によってBを、注文の作者不分明能の分と他資料から移した曲とによってDを設けて、金春三代の大夫の作者付を創作したものと考えられるのであるが、こうした作為を思いつかせたのは、注文の作者不分明能の項に「但シ大略金春能力」と注されていることであろう。近江能や河上神主の分をも加えたのは、室町後期以後金春座が近江と縁が深かったことや、川上神主が金春座の誕生に縁ある初瀬猿楽であったことなどから、事のついでに借用したものであろうか。注文の作者不分明能の項に見える88曲のうち、首部に列挙されている34曲を全然採用していないことや、同じ作者不分明の能を、一部は宗印作としてBに、一部は禅竹作としてDに分けた基準や理由も明らかでないが、前者については、金春作者付の編者の用いた注文に大きな誤脱があった場合が想像できよう。後者については、宗印作を禅竹作より多くする不自然さを避けるためにDの項を設け、注文の作者不分明能の中ほどに並んでいる曲をDに、末の方に並んでいる曲をBに置いたと考えてよいように思われる。

また金春作者付は、注文のみではなく、注文に基づきながら曲名をいろは順に並べた多くの曲名を増補した「いろは作者注文」(三省堂刊国語国文学研究史大成『謡曲狂言』所収)をも参照しているように思われる。Aの項で西王母・六浦を除外し、Bの項に「かるかや」を加え、Dに六浦・舞車を加えていることや、Dの末の注文以外の資料に基づくと見られる16曲が、水瀬を除いてすべていろは作者注文に含まれていること、及び近江能を作者不分明能と同じに扱っていることなどが金春作者付といろは作者注文との関係を想像せしめるのであるが、それについての考察には多くの紙数を要するので、今は省略せざるを得ない。ただ、金春作者付が、作者付としての価値は低いものの、能本作者注文の現存写本の不備を正すための資料としては無視できないものであることを指摘しておくにとどめたい。

〈40・9・1〉



